The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自律学習に基づくオンライン日本語学習コミュニティにおける参加と学習――初級日本語のオンラインクラスでのバーチャル・エスノグラフィー―
Author(s)	陳, 静怡
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91826
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　陳 静 怡　　）	
論文題名	自律学習に基づくオンライン日本語学習コミュニティにおける参加と学習 ―初級日本語のオンラインクラスでのバーチャル・エスノグラフィー―

論文内容の要旨

本研究は中国のオンライン教育市場における民間の遠隔日本語教育機関が運営している成人の日本語オンラインクラスに焦点を当て、クラスコミュニティの学習者、教師が相互に関わり合い、影響し合うことによって、成立する日本語学習・教育のあり方を、オンライン教育を取り巻く教育の商品化というマクロな社会的・経済的文脈と関連づけて明らかにすることを目的とした。

序論では本研究の背景と目的について論じた。まず、グローバル化社会における生涯学習の需要が拡大するにつれて、遠隔教育産業が発達している現状を述べ、その一例として中国のオンライン教育市場を紹介し、そこで起こっている教育の商品化の現状を紹介した。加えて、 筆者とオンライン教育市場にある遠隔日本語教育機関S校との関わり合いを紹介し、そこで啓発された本研究の問題意識を述べた。

第2章では、先行研究の概観を行った。まず、言語学習を社会文化的背景と関連づけて説明する必要があることを述べた上で、遠隔日本語学習については、それを取り巻く教育の商品化というマクロな経済的・社会的文脈が議論されていないという先行研究の問題点を提示した。次に、遠隔日本語教育に関する先行研究では教師や研究者の視点に基づく遠隔プログラムの開発と授業の実践報告が中心であり、学習者の視点に依拠する遠隔学習の過程が着目されていないという問題点を指摘した。このようなアプローチの欠如は、遠隔言語学習・教育を取り巻く社会的文脈が見逃される現状を招いているだけではなく、「よく話す・よく書き込む」行動が教師から見えない学習者は、オンラインコミュニティの積極的な参加者ではないというステレオタイプ的な考え方にも陥りやすいと考えられる。以上を踏まえて、本研究では、遠隔日本語学習・教育の過程を教師、学習者の複数の視点に基づいて、それを取り巻くマクロな経済的・社会的文脈と絡めて、記述・分析するアプローチを採用するという本研究の位置づけを述べた。学習者各々の遠隔学習はクラス内の人間関係というコミュニティの社会的文脈にも影響されるため、クラスコミュニティへの参加に着目するという本研究の方向性を示し、本研究の研究課題を述べた。研究課題①：発話・投稿が多い学習者はどのようにコミュニティへの参加を実践しているか、研究課題②：発話・投稿が限られている学習者はコミュニティへの参加をどのように捉えているか、研究課題③：教師はどのようなコミュニティを作りたいか。それができたか。できなかった場合、そこにはどのような困難があり、教師はどのように対処しているか。

第3章では本研究の理論的枠組みを説明した。まず、遠隔言語学習・教育を当事者の視点をもとに捉えていくために、学習者が自ら学習をコントロールしながら進める過程に着目する学習者の自律性の概念を示し、学習者の自律性と相互作用する教師の自律性の概念を説明した。次に、個々人の遠隔学習・教育の過程をクラスコミュニティの社会的文脈と関連づけて記述・分析するために、言語社会化論と実践コミュニティ論を併用することを述べた。

第4章では本研究で採用したバーチャル・エスノグラフィーの方法論を説明し、調査の対象となったS校のN4クラスの状況と調査を展開する手続きについて述べ、第5章から第7章では本研究が立てた3つの研究課題について答えた。

第5章では発話・投稿が積極的な学習者に着目して分析を行った。その結果、学習者たちはSNSグループへの相互行為への参加を通して、日本語学習に励む学習者像、助け合い・協力し合う学習者像をN4コミュニティで暗黙裏に構築していることが明らかになった。このような役割は励み合う親和関係、教え合う互恵関係、競い合う対立・競争関係などの関係性をコミュニティにもたらしている。学習者間の多様な関係性の形成は、お互いに関わり合うコミュニティの実践以外に、個々の学習者の社会化の経験と今後の社会化の道筋と切り離せないことも分かった。このように、発話・投稿が積極的な学習者たちが実践している参加は、個人のこれまでの社会化の歴史に立ち戻りながら、将来の目標や道筋も見極め、オンラインコミュニティへの関わりの深さと方向性を調整する動態的な「参加」である。参加の意味は、「個人が願う通りの生き方を遂行していくために、オンライン空間のリソースを自由に選択・開発・組み合わせ、制約と折り合いをつけながら、オンラインコミュニティの学習に関わる度合いを動態的に調整すること」と

して学習者間で新たに構築され、実践されている。参加は決して、外部から観察されるような安定した発話・投稿を保持する行動ではないことが分かった。

第6章では発話・投稿が限られている学習者に着目して分析を行った。その結果、学習者が発話・投稿を行うかどうかは、生活全体において日本語学習をどのように位置づけるか、発話・投稿を支える言語技能の習得・向上を遠隔学習に求めているかどうか、オンラインコミュニティと学習スタイル・学習観が合致しているかどうかと関係しており、また学習過程における不安やストレスのような情意的要因にも影響されていることが明らかになった。そして、これらの学習者の中では、オンラインコミュニティと関わり合う中で、自己に対する肯定的な意識が築かれ、コミュニティに対する帰属意識を形成した学習者がいる一方、 仕事、生活など現時点で日本語学習より重きを置くべき事項を優先したり、自らが求める言語学習を遠隔コース外で追求したりするなど、コミュニティから自らを差異化している学習者もいる。このような学習過程の多様性は、オンラインコミュニティは自らのニーズに応じて、関わり合う度合いを調整したり、自由に出たり入ったりすることができる開かれた流動的なオンライン空間であることを表している。ここから明らかになる教育的示唆は、教師の期待通りに「よく話す・よく書き込む」ことなしにも、自分を受け入れてくれる他者とインターネットを通してつながり、現実世界の社会的圧力から一時的に逃げられる居場所を仮想世界で確保できる、自らの信念や興味関心を軸に遠隔コースに埋め込まれているリソースを「摘み食い」しながら、理想の言語学習を追求できるということである。

第7章でオンライン教師に焦点を当てて分析した結果、教師は多様な属性と背景を持つ学習者のニーズをカバーし、学習支援を届け、誰もが安心して学習できるようなオンラインコミュニティの構築を目指しているが、その実践は民間学校の制度的要因によって制約されており、教育の商品化と社会全体に浸透している「聖職者」的教職観は学校の制度的規則を媒介に、教師の実践に足かせをしていることが明らかになった。制約に取り巻かれている中、教師は自律性を発揮し、専門性開発と学習者の自律性を育てる教育に主体的に取り組んだり、同僚と協力・連携を図ったり、学習者への不利益を被らないように、自身を「搾取」する実践を遂行したりするなど、学習者の自律性のための空間を開いている。教師の自律性の発揮は、学習者が自らの需要に応じて学習を自由にデザインしながら、安心して、楽しく学習し、暖かく見守られる自律学習環境を作り出し、自律学習支援のための教師の役割を遂行していた。オンライン教師が共通して学習者に寄り添い、学習者とのラポールの構築に価値を見出していることから、1人で学習できる遠隔環境において、教師―学習者間の対話を通して形成される信頼関係こそが目指すべき教育効果の達成に欠かせない条件の一つであることが分かった。

最後に、第8章では、各章の議論に対する総合的考察を通して、N4コミュニティでは投資と消費の狭間にある日本語学習のあり方が創発されていることを見出した。さらに、この新たな形の日本語学習は、日本語学習を通して社会的成功に辿り着きたい極一部の学習者が相互行為を通して編み出した学習者像、顧客維持・消費促進を目指す教育機関のルールに従った教師の行動や教師の無償の感情労働、また、本質的な「日本文化」を売り込むことで経済力の向上を狙う国の政策によって、共同で織り出された幻想としての「頑張ることを大切にする」文化と密接に関わっていることを明らかにした。本研究の意義としては、遠隔言語学習・教育を取り巻くマクロな社会的・経済的文脈を視野に入れることで、教師のアイデンティティの複雑性に光が照らされた。遠隔言語学習・教育に対する本研究の示唆としては、学習者のアイデンティティの複雑性を考慮した上で、彼らのオンラインコミュニティの学習に関わる度合いの動態的な調整を見極め、個に適した参加のあり方をアドバイスしたり、受容的言語活動に安心して従事できるような環境を提供し、言葉の蓄積を見守るような支援体制を整えるべきであること、このような学習支援に携わる「伴走者」とも言われる教育人材の育成が重要であることを論じた。さらに、遠隔環境の学習支援においては、学習者に寄り添い、彼らへの気配りと対話を通した信頼関係の構築が重要であり、学習者を尊重し、ケアする教師の人間性が求められているが、労働とプライバシーなど教師の権利は制度面から保証する必要があることを述べた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　陳 静 怡　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	義 永 美 央 子
副 査	准教授	難 波　康 治
副 査	教授	小 口　一 郎

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、中国で開講された成人対象の日本語オンラインクラスにおける学習と教育の諸相を、オンライン教育を取り巻くマクロな社会的文脈と関連づけつつ、クラスに参加する学習者・教師それぞれの立場から明らかにすることである。コロナ禍以降、オンラインツールを活用した遠隔教育への関心が世界的に高まっているが、実際に教室に足を運んで学ぶ場合と比較し、学習の継続が困難なことが多く、学習者自身の自律的な学習をどのように維持・促進させるかという課題が指摘されている。また、特に民間の教育機関が提供する遠隔教育は商業的な性格を持ち、そうした特徴がオンラインコースの運営に影響を及ぼし、さらに間接的に学習者に影響を与える可能性がある。本論文はオンラインクラスにおける学習者の参加の様相や、教師を取り巻く制約および教師自身の制約との折り合いの付け方を、バーチャル・エスノグラフィーの手法を用いて生き生きと描き出している。

本論文は全８章で構成され、序章で本論文の背景と目的を述べたのち、第２章では言語学習をマクロな社会的文脈と関連づけて説明する視点を導入した上で、グローバル化社会における言語学習と遠隔教育のあり方を「投資」と「消費」、教育の商品化といった観点から検討する。また、遠隔日本語教育に関する先行研究の多くが教師や開発者の立場からオンラインクラスの開発や授業実践について論じているが、今後はオンラインクラスに参加する当事者の視点に基づく分析が必要であることを指摘している。次の第３章では、学習・教育を当事者の視点から論じるための枠組みとして自律性（オートノミー）の概念を取り上げ、生涯学習論とCEFR、学習者オートノミー、教師オートノミーの側面から検討したのち、個々人のオンラインクラスへの参加の過程をクラスコミュニティの社会的文脈と結びつけて分析するための枠組みとして、言語社会化論と実践コミュニティ論にも目を向けている。第４章ではバーチャル・エスノグラフィーの方法論を紹介するとともに、研究の対象とされるオンラインクラスの概要について説明している。第５章では、オンラインクラスにおける発話・投稿が積極的な学習者に焦点を当て、SNSグループでの相互行為への参加を通して、日本語学習に邁進する学習者像や互いに協力し合う学習者像が構築されており、これらの役割が共に励む親和関係や教え合う互恵関係、競い合う競争関係などをコミュニティにもたらしていることを明らかにした。これに対し、第６章では発話・投稿が限られる学習者に着目し、学習者が発話・投稿を行うかどうかは、学習者の生活の中に日本語学習をどのように位置づけるか、オンラインクラスの学習に発話・投稿を支える言語技能の獲得を求めているか、オンラインクラスと学習者の学習観・学習スタイルが一致しているかと関連するとともに、不安やストレスのような情意的要因にも左右されることを指摘している。続く第７章ではオンライン教師に関する分析を行い、教師は多様な属性と背景を持つ学習者のニーズをカバーし、学習への支援を提供し、誰もが安心して学習できるようなオンラインコミュニティの構築を目指しているが、その実践は民間学校の運営方法や指導方針に制約されているとともに、社会全体に浸透している「聖職者」的教職観の影響も受けていることを示した。ただし、教師はこうした制約に一方的に支配されているわけではなく、自らの専門性の開発に取り組んだり、同僚と連携・協力したり、自らの自由を一部犠牲にしながら学習者から求められる支援を提供したりすることを通じて、自らを取り巻く制約を調整しようとしていることも明らかにしている。最後の第８章では各章の議論に対する総合的考察として、発話・投稿が積極的な学習者の遠隔日本語学習からは、個々人が期待する将来に向けて投資をしながら、他者と共に学ぶ過程の消費を楽しむという形の学習が見出されること、発話・投稿が限られている学習者たちからは、日本語習得の結果よりも学習の過程そのものを楽しむ消費的な学習に加えて、好ましい自己のアイデンティティへの投資としての学習が見出されること、さらに、このような形の日本語学習は、クラスコミュニ

ティにおける「頑張ることを大切にする」文化の構築と密接に関わっていることなどを主張した。また、今後の遠隔言語学習・教育への示唆として、学習者の複雑なアイデンティティを理解し、学習者の学習に関与する度合いの動態的な調整を見極め、言葉の蓄積を見守るような支援体制を整えるべきであることと、このような支援を司る人材の育成が重要であることを論じた。さらに、遠隔環境の学習支援においては、学習者との信頼関係の構築が重要であり、学習者を尊重し、ケアする教師の人間性が求められているが、労働やプライバシーの保持などの教師の権利を制度面から保証する必要があることを述べている。

本論文は遠隔言語学習を議論の中心に据えながら、言語学習・教育の商品化、自律学習、コミュニティとしての教室とコミュニティへの参加としての学習、教師の役割といった広範な論点について説得力をもって論じており、学術的にも教育実践的にも顕著な貢献が認められる研究であると評価できる。特に、フィールドであるオンラインクラスに長期に渡り関与し収集した膨大なデータをもとに、従来の研究では見過ごされがちであった、自発的な発話や投稿が少なく一見すると消極的にしか参加していない学習者が、実際にはそれぞれの人生の軌跡と関連づけて日本語学習への参加に意味を見出していることや、参加者が直接対面することのない遠隔教育においても、画面の向こうにいる他の学習者や教師との関係性の構築が学習の継続に大きく影響していること、遠隔教育での指導や支援に必要な力量を持った教師の育成が必要である一方で、教師に過剰な負担や奉仕を要求しない体制の構築が求められることなどを実証的に示した意義は大きい。複数の概念や理論を統合し論じる際の整合性に若干の不足を感じる部分もあるが、広い視野に基づく挑戦的な研究であるために生じた課題といえ、今後のさらなる発展が期待される。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。